

基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	医療と社会		担当教員	笠井 正晴		
開講時期	1年次前期		総時限数	16時限	授業形態	講義	単位数	2単位

■ 科目内容

北海道鍼灸専門学校の建学、教育理念と沿革を理解し、鍼灸師の役割を考える。
自然科学の歴史と医学の歴史を理解し、西洋と東洋の医学の流れを理解する。
中国における東洋医学と日本鍼灸医療の歩みを知り、統合医療の考えを知る。
医の生命倫理と死生観を考え、民族と宗教についても考察する。
医療安全の考えを学び、実践できる。
医療面接と診察法について学ぶ。
日本と世界の医療制度と社会保障を知る。
最近の医療の進歩を理解する。

■ 到達目標

本校の教育理念、沿革を理解し説明できる。
鍼灸医療の医療全体における位置づけを説明できる。
生命倫理について自分の考えを述べるができる。
日本の医療制度と社会保障について長所、短所を述べるができる。
患者の権利を尊重し、人間性を陶冶し礼節を持った医療人へ成長する。

■ 授業方法・教材

様々な資料を基に教員の作成した教材を用いる。
講義、討論形式
グループ討論で他の生徒の考えを理解する。

■ 学習方法

資料、講義内容を理解し、授業でのテーマを通して医療人として対応の仕方を考え、述べられるようにする。

■ 評価基準

期末試験で評価する。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			本校の教育理念と地域医療に果たす役割
2			鍼灸師と医療界を構成する他職種の構成と役割
3			自然科学としての医療の歴史(1)
4			自然科学としての医療の歴史(2)
5			日本における鍼灸の歩みと統合医療(1)
6			日本における鍼灸の歩みと統合医療(2) / 海外で活躍する卒業生
7			医の生命倫理
8			医の死生観 / 脱法ハーブの危険性
9			医療安全(1)
10			医療安全(2) / 血圧測定法の実際
11			医療面接と診察法
12			東洋医学と西洋医学の診断治療アプローチ / 聴診器の使用法の実践
13			医療と社会保障制度(1)
14			医療と社会保障制度(2)
15			最新の医療とその進歩(1)
16			最新の医療とその進歩(2)

基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	自然科学		担当教員	田中 一馬		
開講時期	1 年次後期		総時限数	16時限	授業形態	講義	単位数	2単位

■ 科目内容

私達の身体は37兆個もの細胞からできており、それらの種類は皮膚、筋肉、免疫、神経の細胞など、270にも及ぶ。肺や肝臓など、それぞれの臓器は固有な細胞で形成されているが、一方で、細胞としての基本的な成り立ちは共通しており、これは他の生物でも同様である。人を含む全ての生命体は細胞の働きによってその活動が支えられており、細胞の営みを知ることは生命の本質を知ることにつながる。

■ 到達目標

- ・細胞の内部構造とその機能について理解する。
- ・細胞がエネルギーを得て生きる仕組みを理解する。
- ・様々なタンパク質の働きについて理解する。
- ・遺伝子と病気との関係を理解する。
- ・細胞同士がコミュニケーションを取る仕組みについて理解する。

■ 授業方法・教材

- ・講義はスライドを用いて行う。講義スライドは印刷して配布する。

■ 評価基準

- ・期末試験により評価する。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項目
1			生命とは何か
2			細胞と細胞内小器官
3			細胞を構成する物質
4			遺伝子
5			遺伝子からタンパク質へ
6			タンパク質の構造
7			タンパク質と化学反応
8			生体エネルギー
9			生体膜と物質輸送
10			細胞の運動
11			細胞間の情報の伝達
12			細胞内の情報の伝達
13			生殖と遺伝
14			遺伝子と病気
15			病原体と免疫
16			多様な細胞が出来る仕組み

基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	心理学		担当教員	奈良 雅之		
開講時期	1 年次後期		総時限数	16 時限	授業形態	講義	単位数	2単位

■ 科目内容

はり師・きゅう師が心理学を学び、その理論や技法を習得する。そうすればそれを日常臨床に活かせるのではないかと。しかし、心理学の領域は広く膨大な知見の上に成り立っていることから、そのすべてを学び理解するためには多くの時間がかかる。興味はあっても躊躇せざるを得ないのが現状だろう。本科目では、心理学の理論や技法の中から、はり師きゅう師にとって役立つ有用な内容を取り上げて学べるように企画されたものである。患者さんとのコミュニケーションを円滑にし、施術効果を高め、治療家としての成長を促すことなどを目的として行う科目である。

■ 到達目標

- ①対人コミュニケーションに関する知識や理論を認識・説明できる。
- ②自己及び他者の感情、行動について理解し、その状況や変化を推論できる。
- ③カウンセリング・面接技術の基礎を学び、その成果を表現することができる。
- ④対象者の多様性を理解し、その個性に応じた対話方法を選択することができる。
- ⑤心理療法についての正しい理解と知識について説明することができる。

■ 授業方法・教材

オンデマンドでの授業とする。

教科書は使用しない、教員作成の配付資料により実施

参考図書は以下の通り

丹澤章八(監)『あはき心理学入門』(ヒューマンワールド社)

丹澤章八(編)『改訂版鍼灸臨床における医療面接』(医道の日本社)

奈良雅之(監)『マンガで身につく! 治療家のための医療面接』(医道の日本社)

■ 評価基準

学期末のレポート課題とその他(授業毎の復習課題)により総合的に評価する。

レポート課題⇒60%、その他⇒40%

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項目
1			コミュニケーションと心理学
2			言語・非言語コミュニケーション
3			パーソナリティ
4			ストレス
5			うつ・不安
6			ポジティブ心理学
7			発達心理学
8			食事・睡眠の心理学
9			説得的コミュニケーション
10			傾聴・共感とカウンセリングマインド
11			インタビューの技法
12			心理療法入門(1) 来談者中心療法、精神分析
13			心理療法入門(2) 行動療法の基礎と応用
14			心理療法入門(3) 認知行動療法
15			医療面接入門
16			まとめ

基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	社会科学(養生論)		担当教員	伊藤 和憲		
開講時期	1年次前期		総時限数	16時限	授業形態	講義	単位数	2単位

■ 科目内容

日本の伝統的な健康法である養生に関して、現代医学的な視点から養生を見直し、その原理や仕組みを理解することで、家庭で行える病気のケアやマネジメント法、さらには日々の健康維持に役立てるために知識を学ぶ。

■ 到達目標

本授業を学ぶことにより、以下の3点を到達目標とする

- ・養生の原理を学ぶことで、患者の症状コントロールや生活指導に役立てられる知識を有する
- ・養生の原理を学ぶことで、健康維持や予防に役立てられ知識を有する
- ・季節に応じた生活の意味を理解し、治療や健康管理に役立てられる知識を有する

■ 授業方法・教材

- ・オンデマンド教材での学習とする。
- ・なお、教材に関しては、オンデマンド講義に沿った専用テキストを配布するが、参考書を用いると、さらに深く学習が可能である。

参考資料: 今日からはめる養生学(集英社インターナショナル)

■ 評価基準

- ・授業毎に回答する感想や学期末のレポート課題により、評価する。

■ 授業計画

1 回から 14 回まではオンデマンド教材による講義とし、15 回、16 回目は対面での授業を予定している。なお、質問に関しては対面の際に受け付けることとする。

回	月/日	出欠	項目
1			養生の必要性を考える
2			養生の基本 1
3			養生の基本 2
4			養生の原理 1:緩める
5			養生の原理 2:温める
6			養生の原理 3:整える
7			養生の原理 4:補う
8			養生の原理 5:鍛える+原理のまとめ
9			季節の養生 1:春・夏編
10			季節の養生 2:秋・冬編
11			症状に対する養生 1:脳と腸から身体を考える
12			症状に対する養生 2:老化と睡眠から身体を考える
13			症状に対する養生 3:食事と運動から身体を考える
14			養生の進め方
15			養生を用いた実践事例
16			養生を生かした街づくりを考える

基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	外国語(医療英語)		担当教員	前期:ティモシイグロース 後期:笠井 正晴		
開講時期	1年次通年		総時限数	16時限	授業形態	講義	単位数	2単位

■ 科目内容

- ・Native speaker の話す日常英会話の表現を理解し、応対ができる
- ・外国人と実際の簡単なコミュニケーションを英会話でできる。
- ・基礎医学の英語表現を学ぶ。
- ・日常生活における鍼灸関連英語の理解と説明ができる。
- ・実地医療で使われる英語表現を学ぶ。

■ 到達目標

- ・基本的な英語力をスキルアップする。
- ・英語を介し東洋医学や中国医学について説明できる。
- ・身体、臓器の英語表現ができる。
- ・代表的な病名を英語表現できる。
- ・医療面接の際の英語表現を説明できる。

■ 授業方法・教材

- ・対面授業で双方向性に学ぶ。
- ・授業教材、補助教材は担当教員が作成したものをを用いる。

■ 学習方法

- ・教材を理解し 英語表現、説明の仕方を学ぶ。
- ・医療面接、問診、身体所見の取り方を英語で学ぶ。

■ 評価基準

- ・期末試験、授業態度により評価する。成績評価は学則に準じる。

■ 連絡事項

- ・授業回数が少ないので欠席、遅刻に留意すること。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			Introductions. Parts of the body (basic) Giving instructions
2			Basic English skills (1) Daily life – listening and speaking Instructions – listening and responding
3			General health topics Basic English skills – health interviews (1) Adverbs of frequency
4			Review Lifestyles – questions and answers. The muscular system (1) Health interviews (2)
5			Review Examining a patient (1) – giving instructions. Basic English skills – present tenses Present tense-descriptive skills
6			The muscular systems (2) Examining a patient (2) – role plays Common medical instructions (2) – speaking Basic English skills – making and completing a questionnaire.
7			Basic English skills – past tense narratives. Past tense-descriptive skills History of acupuncture – reading and speaking. Describing symptoms.
8			Review Large numbers in English The muscular system (3) Basic English skills – making questions.
9,10			Understanding of medical terminology/John Manjiro world
11,12			Anatomy and organ function / Acupuncture in Nepal
13,14			Knowledge of biochemical data required for acupuncturists
15,16			Health care and Nutrition

専門基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	解剖学 I		担当教員	稲垣 侑士		
開講時期	1 年次前期		総時限数	38時限	授業形態	講義	単位数	5単位

■ 科目内容

解剖学 I では、人体を構成している細胞・組織および運動器系に関する基本的な構造や機能について学習する。

■ 到達目標

鍼灸臨床で必要とされる解剖学の知識レベルに到達する。

1. 細胞・組織の構造、機能、分類について説明できる。
2. 骨の名称、部位名について説明できる。
3. 筋の名称、起始部、停止部、支配神経、作用について説明できる。
4. 神経や血管が通る特徴的な部位の局所解剖について説明できる。

■ 授業方法・教材

1. 教員が用意した講義資料を確認し、必要に応じて板書や PC スライドによる解説を行う。
2. 身体を動かしたり、触れたりすることを通じて、運動や体表解剖について理解を深める。
3. 適宜、教室内に置いてある：「解剖学(第 2 版)」(公社)東洋療法学校協会編 医歯薬出版(株)などの教科書や、各自で使いやすい解剖学参考書なども参照して理解を深める。

■ 学習方法

1. 基本的には授業計画の内容に基づいて講義を行うので、該当範囲について予習をした上で授業に出席する。
2. 専門的な用語やイメージを定着できるように、授業後の復習を大切に、文字の手書きやイメージの図示といったアウトプット学習を積極的に取り入れる。
3. 解剖学と生理学の資料を読み比べ、形態と機能を一元的に把握できるように工夫する。

■ 評価基準

中間試験、期末試験の成績で評価する。

※解剖学 I は前期で終了する科目であるため、後期に行う解剖学 II と通算しての成績評価とはならないので、試験結果や欠席回数に留意すること。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			オリエンテーション(解剖学の学習方法) 第1章 人体の区分と方向
2			総論 細胞
3			総論 組織①(上皮組織・結合組織)
4			総論 組織②(筋組織・神経組織)
5			総論 体表構造(皮膚)
6			骨系 上肢帯の骨(鎖骨・肩甲骨)
7			骨系 自由上肢の骨(上腕骨)
8			骨系 自由上肢の骨(橈骨・尺骨・手の骨)
9			骨系 上肢の関節①(胸鎖関節・肩鎖関節・肩関節)
10			骨系 上肢の関節②(肘関節・橈骨手根関節・手の関節)
11			骨系 下肢帯の骨(寛骨・骨盤)
12			骨系 自由下肢の骨①(大腿骨・膝蓋骨)
13			骨系 自由下肢の骨②(脛骨・腓骨・足の骨)
14			骨系 下肢の関節①(股関節・膝関節)
15			骨系 下肢の関節②(足の関節)
16			骨系 脊柱の構成
17			骨系 胸郭の構成
18			骨系 頭蓋骨①
19			骨系 頭蓋骨②
20			筋系 上肢帯の筋
21			筋系 上腕の筋
22			筋系 前腕の筋①(屈筋群)
23			筋系 前腕の筋②(伸筋群)
24			筋系 手の筋 局所解剖(手根管・ギヨン管)
25			筋系 下肢帯の筋
26			筋系 大腿の筋
27			筋系 下腿の筋
28			筋系 足の筋
29			筋系 局所解剖(筋裂孔と血管裂孔・大腿三角)
30			筋系 局所解剖(膝窩・足根管)
31			筋系 体幹の筋①(胸筋・腹筋)
32			筋系 体幹の筋②(背筋)
33			筋系 頭部の筋(表情筋・咀嚼筋)
34			筋系 頸部・項部の筋
35			筋系 局所解剖(頭頸部)
36			筋系 局所解剖(体幹部)
37			筋系 局所解剖(上肢)
38			筋系 局所解剖(下肢)

専門基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	解剖学Ⅱ		担当教員	稲垣 侑士		
開講時期	1年次後期		総時限数	38時限	授業形態	講義	単位数	5単位

■ 科目内容

解剖学Ⅱでは、人体を構成している循環器系、呼吸器系、消化器系、泌尿器系、生殖器系、内分泌系、神経系、感覚器系に関する基本的な構造や機能について学習する。

■ 到達目標

鍼灸臨床で必要とされる解剖学の知識レベルに到達する。

1. 代表的な血管・リンパ管の構造、機能について説明できる。
2. 代表的な中枢神経系、末梢神経系の構造、機能について説明できる。
3. その他、内臓諸器官の構造、機能について説明できる。

■ 授業方法・教材

1. 教員が用意した講義資料を確認し、必要に応じて板書やPCスライドによる解説を行う。
2. 身体を動かしたり、触れたりすることを通じて、運動や体表解剖について理解を深める。
3. 適宜、教室に置いてある「解剖学(第2版)」(公社)東洋療法学校協会 編 医歯薬出版(株)などの教科書や、各自で使いやすい解剖学参考書を用いて理解を深める。

■ 学習方法

1. 基本的には授業計画の内容に基づいて講義を行うので、該当範囲について予習をした上で授業に出席する。
2. 専門的な用語やイメージを定着できるように、授業後の復習を大切に、文字の手書きやイメージの図示といったアウトプット学習を積極的に取り入れる。
3. 解剖学と生理学の資料を読み比べ、形態と機能を一元的に把握できるように工夫する。

■ 評価基準

中間試験、期末試験の成績で評価する。

※解剖学Ⅱは後期だけの科目であるため、前期に行った解剖学Ⅰと通算しての成績評価とはならないので、試験結果や欠席回数に留意すること。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			循環器系 血管系の基礎 心臓①
2			循環器系 心臓②
3			循環器系 動脈系①(大動脈とその分枝)
4			循環器系 動脈系②(頭頸部)
5			循環器系 静脈系①(肺循環・体循環の静脈)
6			循環器系 静脈系②(門脈)
7			循環器系 リンパ系
8			循環器系 胎児循環
9			呼吸器系 鼻腔・副鼻腔
10			呼吸器系 喉頭・気管・気管支
11			呼吸器系 肺・胸膜, 縦隔
12			消化器系 口腔・咽頭
13			消化器系 食道・胃
14			消化器系 小腸・大腸
15			消化器系 肝臓・胆嚢
16			消化器系 膵臓
17			泌尿器系 腎臓①
18			泌尿器系 腎臓②
19			泌尿器系 尿管・膀胱
20			泌尿器系 尿道
21			生殖器系 女性生殖器①
22			生殖器系 女性生殖器②
23			生殖器系 男性生殖器①
24			生殖器系 男性生殖器②
25			内分泌系 総論, 下垂体, 松果体
26			内分泌系 甲状腺, 上皮小体, 副腎
27			神経系 中枢神経系①(総論, 脊髄・伝導路)
28			神経系 中枢神経系②(脳幹・間脳)
29			神経系 中枢神経系③(大脳・小脳)
30			神経系 中枢神経系④(脳室・脳脊髄液)
31			神経系 末梢神経系①(脳神経)
32			神経系 末梢神経系②(脳神経)
33			神経系 自律神経系①(交感神経)
34			神経系 自律神経系②(副交感神経)
35			感覚器系 視覚器①
36			感覚器系 視覚器②
37			感覚器系 聴覚器①
38			感覚器系 聴覚器②

専門基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	生理学 I		担当教員	二本松 明		
開講時期	1 年次前期		総時限数	38 時限	授業形態	講義	単位数	5 単位

■ 科目内容

生理学は正常状態での生体の機能について学ぶ学問である。生理学 I では、多様な人体の機能のうち、細胞、神経系（末梢神経系、中枢神経系）の機能、自律神経系の機能、血液の機能、心臓や血管の機能について学習する。

■ 到達目標

神経系の分類、ニューロン、シナプスなど神経系特有の構造とその働き、中枢神経系（脊髄、脳幹、間脳、大脳、小脳）の機能の特徴、自律神経系の機能の特徴、骨格筋の構造や働き、並びに神経系による運動調節の仕組みを理解する。鍼灸師に必要な生理学の知識レベルに到達する。

1. 細胞の機能（細胞内小器官の機能を含む）を理解し、説明できる。
2. 神経系の分類、ニューロンやシナプスの基礎、中枢神経系（脊髄、脳幹、間脳、大脳、小脳）の機能の特徴を理解し、説明できる。
3. 自律神経系の機能の特徴について理解し、説明できる。
4. 血液の機能の特徴について理解し、説明できる。
5. 心臓、血管（動脈、静脈）の機能の特徴について理解し、説明できる。

■ 授業方法・教材

1. 基本的に板書にて授業を進行するが、板書の他プリント、スライドを使用する。

■ 学習方法

1. 生理学では正常状態における人体の働きの仕組みについて学ぶが、この働きは、各器官の構造の特徴とも密接に関連し合っている。従って解剖学も理解すること。
2. 生理学の知識は2年生、3年生で学習する科目や鍼灸の治効理論の基礎となっている学問であることを忘れないこと。
3. 図表が説明しようとしていることを理解し、説明できるようにすること。

■ 評価基準

- ・中間試験（40%）、期末試験（60%）で評価する。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項目
1			オリエンテーション、生理学の基礎、細胞
2			生理学の基礎 物質代謝、物質の移動
3			神経の分類
4			ニューロンとグリア、有髄神経線維と無髄神経線維、神経の変性と再生
5			静止電位
6			活動電位
7			興奮の伝導
8			神経線維の分類
9			興奮の伝達、興奮性シナプス後電位と抑制性シナプス後電位
10			シナプスの可塑性、神経伝達物質
11			末梢神経系、中枢神経系の概要、脊髄の機能、脳幹の機能
12			末梢神経系、中枢神経系の概要、脊髄の機能、脳幹の機能
13			末梢神経系、中枢神経系の概要、脊髄の機能、脳幹の機能
14			末梢神経系、中枢神経系の概要、脊髄の機能、脳幹の機能
15			末梢神経系、中枢神経系の概要、脊髄の機能、脳幹の機能
16			間脳の機能、小脳の機能、大脳(皮質、髄質)の機能、記憶、脳波
17			間脳の機能、小脳の機能、大脳(皮質、髄質)の機能、記憶、脳波
18			間脳の機能、小脳の機能、大脳(皮質、髄質)の機能、記憶、脳波
19			間脳の機能、小脳の機能、大脳(皮質、髄質)の機能、記憶、脳波
20			自律神経系の基礎 交感神経系の特徴
21			自律神経系の基礎 副交感神経系の特徴
22			自律神経系の中枢と自律神経反射
23			自律神経系の神経伝達物質と受容体
24			自律神経系の神経伝達物質と受容体
25			血液全般の働き、血漿蛋白の産生と働き、赤血球の機能と寿命
26			血液全般の働き、血漿蛋白の産生と働き、赤血球の機能と寿命
27			血液全般の働き、血漿蛋白の産生と働き、赤血球の機能と寿命
28			赤血球のその後 腸間循環とビリルビン、白血球の機能と免疫
29			生体の防御機能
30			生体の防御機能
31			生体の防御機能
32			リンパ球とサイトカイン
33			リンパ球とサイトカイン
34			心臓及び血管の構造、心筋の作用、自動能及び自律神経支配
35			心臓、血管の自律神経支配
36			心周期と心音、血圧の意味
37			心周期と心音、血圧の意味
38			心周期と心音、血圧の意味

専門基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	生理学Ⅱ		担当教員	二本松 明		
開講時期	1 年次後期		総時限数	38 時限	授業形態	講義	単位数	5 単位

■ 科目内容

生理学は正常状態での生体の機能について学ぶ学問である。生理学Ⅱでは、多様な人体の機能のうち、心臓や血管、呼吸器、消化器、腎臓や泌尿器系の構造と機能、内分泌系（ホルモン）の分泌と作用について学習する。

■ 到達目標

1. 心臓、血管（動脈、静脈）の機能の特徴について理解し、説明できる。
2. 肺、気管支など呼吸器の機能の特徴について理解し、説明できる。
3. 消化器の機能の特徴について理解し、説明できる。
4. 腎臓の構造と機能、泌尿器系の構造と尿生成の仕組みについて理解し、説明できる。
5. ホルモンについて、分泌器官とその作用を理解し、説明できる。

■ 授業方法・教材

1. 基本的に板書にて授業を進行するが、板書の他プリント、スライドを使用する。

■ 学習方法

1. 生理学では正常状態における人体の働きの仕組みについて学ぶが、この働きは、各器官の構造の特徴とも密接に関連し合っている。従って解剖学も理解すること。
2. 生理学の知識は2年生、3年生で学習する科目や鍼灸の治効理論の基礎となっている学問であることを忘れないこと。
3. 図表が説明しようとしていることを理解し、説明できるようにすること。

■ 評価基準

- ・中間試験（40%）、期末試験（60%）で評価する。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			血圧に影響する因子、血圧異常
2			血圧に関わる反射 圧受容器反射、心肺部圧受容器反射
3			血圧に関わる反射 圧受容器反射、心肺部圧受容器反射
4			呼吸器系の構造、呼吸運動のしくみ
5			呼吸器系の構造、呼吸運動のしくみ
6			肺の換気能、ガス交換のしくみ、呼吸運動の神経性調節
7			肺の換気能、ガス交換のしくみ、呼吸運動の神経性調節
8			呼吸の神経性調節と情動
9			呼吸の神経性調節と情動
10			消化器系全般の構造、口腔、唾液腺、嚥下
11			消化器系全般の構造、口腔、唾液腺、嚥下
12			嚥下、食道、胃運動の局所性、神経性、ホルモン性調節
13			嚥下、食道、胃運動の局所性、神経性、ホルモン性調節
14			小腸の運動、消化酵素
15			消化管ホルモン、大腸の機能
16			膵臓、肝臓の構造と機能、膵液分泌と消化管ホルモン
17			膵臓、肝臓の構造と機能、膵液分泌と消化管ホルモン
18			肝臓の機能と胆汁の生成、分泌
19			肝臓の機能と胆汁の生成、分泌
20			排便反射
21			3 大栄養素の働きと代謝
22			泌尿器系の構造、腎臓の構造と機能
23			泌尿器系の構造、腎臓の構造と機能
24			腎臓の水の再吸収の仕組み
25			腎臓の水の再吸収の仕組み
26			腎臓と体液量調節、血圧調節
27			腎臓と体液量調節、血圧調節
28			排尿反射と神経系
29			排尿反射と神経系
30			内分泌系 内分泌と外分泌の違い、視床下部
31			下垂体ホルモンの作用
32			甲状腺ホルモンの作用
33			副甲状腺ホルモンの作用、血漿カルシウムイオン濃度の調節
34			膵臓のホルモンと血糖値の調節
35			副腎髄質ホルモンの分泌調節と作用
36			副腎皮質ホルモンの分泌調節と作用
37			主要な内分泌疾患、性ホルモン
38			性周期、生殖機能

専門基礎分野

昼間部 夜間部	昼間部 夜間部	科目名	医療概論		担当教員	工藤匡 藤井義博		
開講時期	1年次前期	総時限数	15 時限	授業形態	講義	単位数	2単位	

■ 科目内容

施術者、医療関係者として知っておかなければならない現行の医療システムと倫理、その他の問題点(インフォームドコンセント、QOL、バイオエシックス等の概念)について学習する。

■ 到達目標

- ・医療の歴史についての概要を説明できる。
- ・現代の医療制度についての概要を説明できる。
- ・施術者、医療従事者として知っておかなければならない現行の医療システムと倫理、その他の問題点(インフォームドコンセント、QOL、バイオエシックス等の概念)について自分の考えを説明できる。

■ 授業方法・教材

- ・教員が作成した資料、プリント

■ 学習方法

- ・教員が配布した資料をもとにして授業を進めていく

■ 成績評価

- ・期末試験(100%)

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			現代医学の課題(西洋近代医学・東洋医学)
2			医の倫理
3			健康の考え方
4			病気の考え方
5			多様な治療法
6			死の問題
7			脳死・臓器移植
8			治療法の決定
9			プライマリヘルスケア
10			国民医療費
11			公的医療保険
12			介護保険
13			痛みの社会的影響
14			施術者の倫理
15			医の歴史

専門分野

昼間部 夜間部	昼間部 夜間部	科目名	はり・きゅう理論		担当教員	煤賀 有美		
開講時期	1 年次後期	総時限数	16 時限	授業形態	講義	単位数	2 単位	

■ 科目内容

東洋医学には長い歴史がある一方で、科学性が乏しいと言われてきたが、近年は鍼灸の作用機序が明らかになってきて、科学的な根拠に基づく医療が提供できるようになりつつある。患者さんにもインフォームドコンセントが必須な時代であり、鍼や灸の効果はもちろん、治療内容や、リスク管理など、患者さんが納得して安心・安全な鍼灸治療を提供することが求められる。本講を通じて、鍼灸の基礎的なメカニズムや理論、リスクについて学んでいく。

■ 到達目標

- ・鍼灸の定義や特徴を説明できるようにする
- ・鍼灸治療に用いる用具やその方式や術式について説明することができる
- ・鍼灸の適応・禁忌事項を説明できるようにする
- ・鍼灸のリスク管理、および対応・対策について説明できるようにする

■ 授業方法・教材

- ・「図解鍼灸臨床手技マニュアル」：医歯薬出版株式会社
- ・「鍼灸安全対策マニュアル」：(社) 全日本鍼灸学会臨床情報部安全性委員会編、医歯薬出版株式会社
- ・教員が作成した資料、プリント

■ 学習方法

- ・教科書と教員が配布した資料をもとにして授業を進めていく
- ・解剖学、生理学、はりきゅう実技の知識と関連が高いため、復習しておくこと

■ 成績評価

- ・期末試験(100%)

担当教員 煤賀 有美

資格 はり師・きゅう師、看護師

所属 北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター

経歴 SSC ビューティークリニック

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項目
1			はりきゅうとは何か、鍼灸治療の変遷
2			感染予防(標準予防策)
3			鍼の基礎知識、古代九鍼
4			灸の基礎知識、艾の種類
5			灸の材料、艾の製法
6			モグサ作り
7			刺鍼の方式、刺鍼の術式
8			灸術の種類
9			十七手技
10			十七手技、鍼灸施術における感染対策
11			リスク管理(安全対策の基本、適応と禁忌)
12			リスク管理(有害事象)
13			特殊鍼法(小児鍼、皮内鍼法)
14			特殊鍼法(低周波鍼通電療法、灸頭鍼法)
15			まとめ
16			まとめ

専門分野

部	昼間部 夜間部	科目名	東洋医学概論		担当教員	阿部 吉則		
開講時期	1 年次通年		総時限数	60 時限	講義形態	講義	単位数	8 単位

■ 科目内容

東洋医学は中国古代に源を発し、日本をはじめ東アジア諸国に広がり、各国それぞれ独自の発展を遂げてきた。東洋医学の考え方は、人と自然・環境などとの調和と統一性を重視するもので、身体のバランスを整えることで症状の改善を目指すものである。

鍼灸の技術は、東洋医学における治療手段のひとつとして育まれてきた。本講では、東洋医学の成り立ちや、東洋医学が基盤とする基本的なものの考え方を学ぶ。そのうえで、人体観、疾病観、治療論の各項目について、その概要を理解する。

■ 到達目標

- ・東洋医学の特徴や現代における有用性を説明することができる。
- ・身の周りの人の病態を東洋医学的に説明することができる。
- ・症状、所見から東洋医学的な証立てができる。

■ 授業方法・教材

- ・教科書：「新版東洋医学概論」（東洋療法学校協会編、医道の日本社）。
- ・教員が作成したサブノート
- ・参考書：東洋医学に関して一般向けに書かれた書籍が、数多く出版されている。気に入ったものを選んで、目を通してみるとよい。本校図書室にも多くの書籍がある。

■ 学習方法

- ・講義内容を日常生活に応用して考えてみる。
- ・東洋医学的なものの見方、考え方に慣れる。
- ・Teamsには授業で行った内容をオンデマンド配信しているので活用するとよい。

■ 評価基準

- ・中間試験、期末試験、小テスト、提出物、授業への貢献、発言などで評価する。
- ・出席、遅刻、授業態度により、加減することがある。

■ 連絡事項

- ・教科書、サブノートは毎回持参すること。
- ・資料を適宜 teams にてアップする。

担当教員 阿部 吉則

資 格 はり師・きゅう師 あん摩マッサージ指圧師

所 属 北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター

経 歴 ユリ治療室

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			東洋医学の歴史
2			東洋医学の歴史
3			日本における東洋医学の歴史
4			日本鍼灸の特徴
5			東洋医学の思想 陰陽論・五行論
6			東洋医学の思想・考え
7			気の生理と症状
8			血の生理と症状
9			津液の生理と症状
10			精の生理と症状 生理物質の相互関係
11			神の生理と症状
12			陰陽の生理と症状
13			気血津液精神のまとめ
14			気血津液精神のまとめ
15			蔵象学説総論
16			肝の生理
17			肝の生理・病理
18			肝の病理
19			心の生理
20			心の病理
21			脾・胃の生理
22			脾・胃の病理
23			肺の生理
24			肺の病理
25			腎の生理
26			腎の病理
27			六腑の生理と病理
28			臓腑の相互関係
29			蔵象学説まとめ

30			蔵象学説まとめ
31			病因 六淫
32			病因 内傷病因
33			弁証論治 概要
34			六経弁証、衛気営血弁証、三焦弁証
35			十二経脈弁証
36			十二経脈弁証
37			奇経八脈弁証
38			四診(舌診)
39			四診(舌診)
40			四診(聞診)
41			四診(問診)
42			四診(問診)
43			四診(脈診概要)
44			四診(腹診概要)
45			難経六十九難の補瀉
46			弁証論治 (八綱弁証)
47			弁証論治 (八綱弁証)
48			脈診・腹診(実技)
49			脈診・腹診(実技)
50			脈診・腹診(実技)
51			脈診・腹診(実技)
52			鍼灸の補瀉
53			古代刺法 五刺・九刺・十二刺
54			弁証論治 弁証トレーニング
55			弁証論治 弁証トレーニング
56			弁証論治 弁証トレーニング
57			弁証論治 弁証トレーニング
58			弁証論治 弁証トレーニング
59			弁証論治 弁証トレーニング
60			弁証論治 弁証トレーニング

専門分野

部	昼間部 夜間部	科目名	経絡経穴概論		担当教員	志田 貴広		
開講時期	1年次通年		総時限数	60 時限	授業形態	講義	単位数	8 単位

■ 科目内容

1年次の経絡経穴概論では経絡経穴の知識(各経絡の流注や所属する経穴名、穴名の由来、経穴を取穴するために必要な解剖学的知識など)や実際の経穴取穴の技術を学修する。

■ 到達目標

1. 経絡と経穴に関する基本的な知識を身につける。

■ 授業方法・教材

教科書:「新版 経絡経穴概論 第2版」

1. 教科書や教員が作成した資料を用い、座学と取穴の実技を並行して行う。

■ 学習方法

1年間で361穴の経穴を学び、その概要を覚える必要があるため、授業前後の予習や復習を行うことが望ましい。また、座学と並行して行われる取穴の実技には積極的に参加し、経験を積むようにすること。

■ 評価基準

中間試験と期末試験で評価する。

担当職員 志田 貴広

資格 はり師・きゅう師

所属 北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター

経歴 みらい鍼灸院

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			オリエンテーション
2			東洋医学の概要
3			第1章 経絡経穴の基礎
4			第1章 経絡経穴の基礎
5			第1章 経絡経穴の基礎
6			第1章 経絡経穴の基礎
7			第1章 経絡経穴の基礎
8			第1章 経絡経穴の基礎
9			第2章 経脈・経穴 督脈
10			第2章 経脈・経穴 督脈
11			第2章 経脈・経穴 督脈
12			第2章 経脈・経穴 督脈
13			第2章 経脈・経穴 任脈
14			第2章 経脈・経穴 任脈
15			第2章 経脈・経穴 任脈
16			第2章 経脈・経穴 手の太陰肺経
17			第2章 経脈・経穴 手の太陰肺経
18			第2章 経脈・経穴 手の陽明大腸経
19			第2章 経脈・経穴 手の陽明大腸経
20			第2章 経脈・経穴 手の陽明大腸経
21			第2章 経脈・経穴 手の陽明大腸経
22			第2章 経脈・経穴 足の陽明胃経
23			第2章 経脈・経穴 足の陽明胃経
24			第2章 経脈・経穴 足の陽明胃経
25			第2章 経脈・経穴 足の陽明胃経
26			第2章 経脈・経穴 足の陽明胃経
27			第2章 経脈・経穴 足の陽明胃経
28			第2章 経脈・経穴 足の太陰脾経
29			第2章 経脈・経穴 足の太陰脾経
30			第2章 経脈・経穴 足の太陰脾経
31			第2章 経脈・経穴 手の少陰心経
32			第2章 経脈・経穴 手の少陰心経
33			第2章 経脈・経穴 手の太陽小腸経
34			第2章 経脈・経穴 手の太陽小腸経

35			第2章 経脈・経穴 手の太陽小腸経
36			第2章 経脈・経穴 手の太陽小腸経
37			第2章 経脈・経穴 足の太陽膀胱経
38			第2章 経脈・経穴 足の太陽膀胱経
39			第2章 経脈・経穴 足の太陽膀胱経
40			第2章 経脈・経穴 足の太陽膀胱経
41			第2章 経脈・経穴 足の太陽膀胱経
42			第2章 経脈・経穴 足の太陽膀胱経
43			第2章 経脈・経穴 足の少陰腎経
44			第2章 経脈・経穴 足の少陰腎経
45			第2章 経脈・経穴 足の少陰腎経
46			第2章 経脈・経穴 手の厥陰心包経
47			第2章 経脈・経穴 手の厥陰心包経
48			第2章 経脈・経穴 手の少陽三焦経
49			第2章 経脈・経穴 手の少陽三焦経
50			第2章 経脈・経穴 手の少陽三焦経
51			第2章 経脈・経穴 手の少陽三焦経
52			第2章 経脈・経穴 足の少陽胆経
53			第2章 経脈・経穴 足の少陽胆経
54			第2章 経脈・経穴 足の少陽胆経
55			第2章 経脈・経穴 足の少陽胆経
56			第2章 経脈・経穴 足の少陽胆経
57			第2章 経脈・経穴 足の少陽胆経
58			第2章 経脈・経穴 足の厥陰肝経
59			第2章 経脈・経穴 足の厥陰肝経
60			第2章 経脈・経穴 足の厥陰肝経

専門分野

部	昼間部 夜間部	科目名	はり・きゅう実技		担当教員	川浪勝弘 煤賀有美		
開講時期	1年次通年		総時限数	90時限	授業形態	実技	単位数	6単位

■ 科目内容

本講義では、はり師・きゅう師に必要な基本実技を学び、正確かつ安全に身体へ刺鍼・施灸を行うことが出来るように反復した基礎練習を行う。また、施術用具とその取扱い、身体各部における治療点としての経穴の正しい取穴、刺鍼法、施灸法を修得する。

■ 到達目標

- ・消毒を含めた刺鍼の手順を実践できる。
- ・鍼の刺鍼技術と正しい刺鍼方法を修得できる。
- ・散艾から一定の大きさの艾炷を作成できる。
- ・身体各部の治療点（経穴）を正しく取穴できる。
- ・鍼灸施術の治療点と管理を取り扱う方法を修得する。

■ 授業方法・教材

- ・教材：「図解鍼灸臨床手技マニュアル」医歯薬出版株式会社
「新版 経絡経穴概論 第2版」東洋療法学校協会編 医道の日本社
- ・その他の教材として鍼（銀製）、もぐさ、線香、刺鍼練習器（鍼枕）、施灸練習器を使用する。

■ 学習方法

はりきゅう実技は鍼灸の根幹をなすものであることを理解する。はり・きゅうの実技は実際に体験しなければ修得できるものではない。そのため、授業中に積極的に実習を行うこと。また本講義は、はり・きゅうを実際に使用する実習科目であるため、実習における身なりを整えること。特に白衣の着用、頭髪、爪などに注意すること。講義開始時間までに講義に必要な準備を済ませること。

■ 評価基準

- ・実技試験：60点以上（前期中間実技試験、前期期末実技試験、後期期末実技試験）
- ・出席率：80%以上

担当教員 川浪 勝弘

資 格 はり師・きゅう師

所 属 北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター

経 歴 札幌センチュリー病院

担当教員 煤賀 有美

資 格 はり師・きゅう師、看護師

所 属 北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター

経 歴 SSC ビューティークリニック

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			鍼灸施術の意義と役割 施術上の注意 実習室の管理と清潔保持
2			使用用具の管理 取扱いの実際 滅菌等
3			鍼の基本実技 刺鍼方法 管鍼法を中心として
4			灸療法の実際 艾・線香について 灸の種類
5			鍼の基本練習 挿管法(両手・片手)
6			灸の基本練習 艾炷の作成 円錐形の作り方と摘み方 大きさの加減の仕方
7			鍼の基本練習 挿管法(両手・片手) 揉法(前と後)
8			灸の基本練習 艾炷の作成 円錐形の作り方と摘み方 大きさの加減の仕方 米粒大
9			鍼の基本練習 挿管法(両手・片手) 揉法 押手
10			灸の基本練習 艾炷の作成 円錐形の作り方と摘み方 大きさの加減の仕方 米粒大
11			鍼の基本練習 双手挿管法 揉法 押手 弾入
12			灸の基本練習 艾炷の作成 米粒大 半米粒大
13			鍼の基本練習 双手挿管法 揉法 押手 弾入 刺入(送り込み)
14			灸の基本練習 艾炷の作成 米粒大 半米粒大
15			鍼の基本練習 双手挿管法 揉法 押手 弾入 刺入(送り込み)
16			灸の基本練習 艾炷の作成 半米粒大 点火練習
17			鍼の基本練習 片手挿管法 揉法 押手 弾入 刺入(送り込み)
18			灸の基本練習 艾炷の作成 半米粒大 点火練習
19			鍼の基本練習 片手挿管法 揉法 押手 弾入 刺入(送り込み)
20			灸の基本練習 艾炷の作成 半米粒大 点火練習
21			鍼の基本練習 片手挿管法 揉法 押手 弾入 刺入(送り込み)
22			灸の基本練習 艾炷の作成 半米粒大 点火練習
23			鍼の基本練習 片手挿管法 揉法 押手 弾入 刺入(送り込み)テスト
24			灸の基本練習 艾炷の作成 半米粒大 点火練習
25			鍼の基本練習 自身の下肢への刺入
26			灸の基本練習 自身の踵への施灸
27			鍼の基本練習 自身の下肢への刺鍼
28			灸の基本練習 自身の踵への施灸
29			鍼の基本練習 自身の下肢への刺鍼
30			灸の基本練習 自身の踵への施灸
31			鍼の基本練習 自身の下肢への刺鍼
32			灸の基本練習 自身の踵への施灸
33			鍼の基本練習 ペアで下肢への刺鍼
34			灸の基本練習 ペアで踵への施灸
35			鍼の基本練習 ペアで下肢への刺鍼
36			灸の基本練習 ペアで踵への施灸
37			鍼の基本練習 ペアで下肢への刺鍼
38			灸の基本練習 ペアで踵への施灸
39			鍼の基本練習 ペアで下肢への刺鍼

40		灸の基本練習 ペアで踵への施灸
41		身体各部の刺鍼・施灸
42		身体各部の刺鍼・施灸
43		身体各部の刺鍼・施灸
44		身体各部の刺鍼・施灸
45		手の太陰肺経 要穴
46		手の太陰肺経 要穴
47		手の陽明大腸経 要穴
48		手の陽明大腸経 要穴
49		足の陽明胃経 要穴
50		足の陽明胃経 要穴
51		足の太陰脾経 要穴
52		足の太陰脾経 要穴
53		手の少陰心経 要穴
54		手の少陰心経 要穴
55		手の太陽小腸経 要穴
56		手の太陽小腸経 要穴
57		足の太陽膀胱経 要穴
58		足の太陽膀胱経 要穴
59		足の少陰腎経 要穴
60		足の少陰腎経 要穴
61		手の厥陰心包経 要穴
62		手の厥陰心包経 要穴
63		手の少陽三焦経 要穴
64		手の少陽三焦経 要穴
65		足の少陽胆経 要穴
66		足の少陽胆経 要穴
67		足の厥陰肝経 要穴
68		足の厥陰肝経 要穴
69		背部俞穴
70		背部俞穴
71		背部俞穴
72		腹部募穴
73		腹部募穴
74		腹部の取穴
75		上肢の取穴
76		上肢の取穴
77		上肢の取穴
78		上肢の取穴
79		上肢の取穴
80		下肢の取穴
81		下肢の取穴
82		下肢の取穴

83			下肢の取穴
84			下肢の取穴
85			応用実習
86			応用実習
87			応用実習
88			応用実習
89			応用実習
90			応用実習